

JISS 第3回スタディツアーフ「福島県飯館村」感想

東京大学教養学部3年 仲井成志

第3回スタディツア。被災地への訪問とあって、過去2度（群馬県南牧村、三重県伊勢志摩）とは全く異なる心境のもと、福島県飯館村に足を踏み入れた。「本当の復興はまだまだこれから」。メディアを通じて流れてくる情報は「正確」ではあるかもしれないが、どうも「リアル」ではない。テレビを通すと親近感が薄れてしまう。私が福島、そして東北の被災地に対して抱いていた感情は「自分には関係ない」。しかし、実際に飯館村を訪れ、再生の会の方々にお話を伺うなかで、「見えない」もの、「見えなかった」ものが見えてきた。

ひとつめは「見えない恐怖」。これは菅野さんが座談会の折におっしゃったことだ。眼には見えないが、確かにそこにあり、人間にも、動物にも、そして植物にも確かに悪影響を及ぼす放射能。広島で原爆投下後に降った黒い雨にも似ているが、それは「黒」かった。つまり、ある程度は「見える恐怖」だった。しかし飯館村に降り注いだのは「黒」くもなく「雨」でもない、「透明な何か」だ。メディアを通じて、飯館村をはじめ福島県は放射能に苦しめられていることは知識としては知っていた。だからこそ国によって大々的に除染作業が行われていたのだろう。しかし、いくらキャスターやリポーターに「恐怖」だと言われても、どんな恐怖で、その何が問題で、どうすれば克服できるのかは、全くもって分からなかった。その点、菅野さんや千恵子さんのお話は強烈だった。そして、初めてその「恐怖」が実感として身に染みた。千恵子さんは「データで安全と分かっていても、飯館の野菜が食べられなくなった」とおっしゃいました。なるほど「見えない恐怖」とは、データによっても可視化できないものなのだ。つまり、データが無いから見えないのでない。まさに「そこにはない」から「見えない」し、それがいつまでも「恐怖」として残存するのだ。

ふたつ目は「見えなかった溝」。見えない恐怖と同様に、菅野さんをはじめ田尾さんらが強調されたのは、国・行政との信頼関係の問題でした。避難指示基準の不明確さが生んだ「ボロボロの初動体制」。さらに環境省の除染後の対応、計測方法の杜撰さ。いくつもの層が折り重なり、「不信感」という大断層が生まれてしまいました。この「行政との溝」とも言うべき事態は、飯館村を訪れるまでまったく見えていませんでした。今年の4月に「避難指示解除」のニュースが流れた際も素直に「お、よかったな」とか「復興は達成間近か」などという（今から思えばお恥ずかしい限りの）感想を抱いていました。しかし、現実は甘くはありません。一度ボロボロになった信頼関係は、すぐには修復できないのが常です。田尾さんは「信頼関係をどうにかしない限り、いっこうに復興は進まない」とおっしゃいました。福島に「行政との溝」という、外からは全く「見えなかった溝」があることを実感しました。

「福島の復興なくして東北の復興なし。東北の復興なくして日本の再生はない」。たしかにその通りだとは思いますが、それでは福島、東北、そして日本を動かす政府以外のひとびとは蚊帳の外です。ここは一歩進めて、「福島への理解なくして東北の復興なし。東北への理解なくして日本の理解はない」と言い換えたいと思います。ふたつの「見えないもの」がはっきりと意識できるようになつたいま、私たちに求められるのは、それを胸に留めておくことであり、また今後も福島に関わる情報（ニュースに限らず）にアンテナを張りつづけ、真の「理解」を目指すことではないでしょうか。それが紛れもなく、「日本の理解」に直結するのです。

初めての被災地訪問。震災発生が2011年だったことを鑑みて、私は当初、今回のスタッフで何を感じられるの、学べるのだろうかと全く見当もつかず、もしかしたら生々しさのようなものは特にないのかもしれないという極めて楽観的な気持ちで福島へ向かっていた。しかし、テレビで見る情報や友人がFacebookでシェアする情報に心を打たれることはそうなのだが、なかなか自分ごとして捉えられてこなかった6年間を一瞬で恥じることとなるスタッフになる。

福島に到着し、車に揺られながら飯館村に向かうと意外とすぐに到着。しかしその様子は福島市とは全く異なっていた。田んぼや畠の栄養ある部分は完全に削り取られ、砂漠の砂のような表面が並び、水はけの悪さは私にでもわかるほど。そんな地面があちこちでむき出しな風景を見て、本当に苦しい気持ちでいっぱいになった。立ち並ぶ商店街も「普通」のようで、実際は誰も営んでいない・住んでいないゴーストタウン。人が歩いている！と思っても除染対応者。徐々に気づく「普通じゃない」ことに対して感じた気持ちは、おそらく、未来をどう描いていいのかわからない・希望の持ち方がわからないということに対する悲しさと切なさだったように思う。南牧村に行った時、確かに問題がそこにあることはわかつてはいたが、WWOOFの取り組みや実際に移住を決意された方からは確かに未来を感じた。しかしそれが今回はなかったように感じ、下ばかり見てしまっていた。

しかし、2日目に顔を上げて周りを見渡すとそこには心落ち着く自然があり、さらに”最先端”的除染技術やビニールハウスがあった。飯館村村長になると語る若者の存在や、飯館村に通い、新しいことに取り組み続ける方々の存在の大きさとパワーにひたすら圧倒された。確かに、除染されていない土地は残っていて計測器を置かないと放射能があるとわからない、見えない恐怖はつねにつきまとった。しかし、そこには東京には絶対にない豊かさがあった。

震災の起きる前から観光地として迷子になり、そして起きてしまった震災。机上でどんなに考えても簡単に解決出来る問題でないことは明らかであるし、いま活動されている方々も描いていらっしゃる未来はそれぞれであった。ただ、そのもやもやを私も実際に共有できしたこと、怖さも未来を描きたくなるうずうずを感じられて本当によかったです。辛いと言いながらたくさん言葉を紡ぎ出してくださいったり、美味しいご飯・お野菜をくださったり、あちこち飯館村の「今」を紹介すべく連れて行ってくださった全ての方々に心から感謝したい。

思っていた以上に、がらんとしていて人がいない。初めの印象である。ひんやりとした空気が澄み渡り、美しいが、どこか寂しげな飯館村の風景に衝撃を受けた。除染され、ひび割れた足元の田から目を上げると、青々とした野放しの縁が際限なく広がっている。放射線という見えない恐怖に襲われ、飯館村から失われたものの重さに、一日目は言葉が上手く出てこなかった。

今回は、二日間にわたってふくしま再生の会の活動を見学・体験させて頂いた。すると、最後には、私には見えていなかった、飯館村再生への希望の芽生えに気付かされた。これからが村の新しい始まりなのだと勇気づけられた。

「生活を奪われた」そう菅野さんはおっしゃった。どういう気持ちなのかと思い巡らせたが、村の方の気持ちに完全に寄り添うには程遠い。なぜなら、私は土地に根ざした暮らしをしていないからである。「山、水、空気、川、一つでも欠けてはならない」暮らしをしたことは悲しいことに、無いのである。良くも悪くも都会に慣れてしまった私は、大きな溝を感じ、どうしても歩み寄りきれないことに悔しさを覚えた。「私にできることもきっとあるはず」と理由もなく思っていた自分の甘さを感じた。

では、私にできることとは何か、改めて考えてみた。それはやはり、「飯館村について知り、信頼できるデータを伝え、また足を運ぶ」ということである。「話題にする」だけでも、私達のできることだとおっしゃり、私の質問に対しても包み隠さず心境をお話ししてくださった菅野さんには感謝してもしきれない。

また、見えないものを「見える」化するふくしま再生の会の数々の取り組みには驚くばかりであつたし、自分で線量計を持って、「見える」化して行動することには確かに安心感があった。

「次はどうしようか。この土地はこうできて、こういった取り組みができると思うんだ。」と各所で田尾さんや溝口教授がお話しされるのを聞いていると思わず笑顔になれたし、飯館の可能性を「までいに」探していくことは楽しいだろうなと思った。

マキバノハナゾノは、私にとって大好きな場所になった。おひとりでここまで花園を造られたことの偉大さに感動したし、1面に霧が立ち込める神秘的な花園は本当に美しかった。植樹された桜が満開になって、花々に溢れたハナゾノをまた見に行きたいと強く思った。

最後に、二日間通して飯館村を案内してくださった田尾さんや溝口教授を初めとした、ふくしま再生の方々、企画し進めてくれた JISS のメンバーに心から感謝し、結びの言葉とさせていただきたい。

東京大学法学部3年 S.H.

かつて田んぼだった土地が緑色のカバーで覆われ、その中には放射能で汚染された土が詰まっている。覆われていない土地には山から持ってきた土が被せられているが、地面は白くひび割れ、素人目にもあまり豊かでなさそうだと分かる。その光景を忘れるることは一生ないだろう。

普通に暮らしていた土地が汚染され、山林までカバーする完全な除染の計画はまだない。根気強く除染を続けることで元に少しでも近い状態で暮らせるようになる可能性があるが、それは非常に膨大な作業だろう。ガイガーカウンターを持って村中を案内して頂きながら、この場所ではものすごいことが起こり、今も続いているのだと痛感した。

でも、そのような場所でもふくしま再生の会の方々が活動してこられて、飯館村での暮らしが少しでも取り戻せるように色々な工夫・試みをされている姿には深い感銘を受けた。

マキバノハナゾノで車を降りた時、この世のものではないような美しい光景だと思った。霧と丘一面の花が合わさって、とても幻想的な光景が生まれていた。今回の訪問では原発事故の爪痕の深さとともに、人間の力の偉大さも強く感じた。あんなに広くて美しいハナゾノを作ること、土壤や害獣、放射能など様々な問題に立ち向かいながら米や野菜、花を育てることは並大抵の事ではないと思う。訪問の機会を下さり本当にありがとうございました。

東京大学経済学部3年 M.E.

今回の訪問で何より心に残ったのは、飯館村に長年住んでこられた方々が震災直後から今に至るまでの経験を語られる際の、その語り口でした。こんなにも重い言葉を本人の口から直接お聞きするような経験は初めてでした。事故や復興に向けた取り組み・課題に関するお話の言葉の節々から、強く根深い「不信感」が感じられました。行政を筆頭に、福島に苦労を押し付け見捨てたかのように振る舞う日本全体への失望と怒り。言葉には出ずとも、「東京」という言葉が発せられる際に感じる微妙な刺々しさはショックでした。「震災という不幸を前に日本人は団結した」といった言説をよく耳にしますが、その陰でこんなにも埋めがたい断絶が生まれてしまったことを正確に理解している日本人はどれほどいるでしょうか？

高校時代に福島復興のための募金活動に関わったことを除けば、今までの私は取り立てて福島の現状を調べることも、何か行動することもなく、メディアで時々取り上げられるのを眺める程度でした。大変恥ずかしく、申し訳ないことに、他人事を貫こうとしていたというのが正直なところです。今回の訪問は、福島の問題は全日本国民が共有する問題であり、今後の対応が日本という国の在り方を左右する最重要問題なのだと肌で感じさせてくれる貴重な体験となりました。このような機会を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。今後、日本社会を支え、建て直す世代の一員として、責任をもって考え、行動できる者となりたいと考えます。

最後になりましたが、今回は突然押しかけて来た私達に、村内を案内しながら丁寧に説明下さり、更に泊まる場所や美味しいお食事までご用意頂き、感謝してもしきれません。誠にありがとうございました。

村を訪れて印象的だったのは、村を囲む山々の豊かな緑とは対照的な、何も作付けされていない白色の無機質な田畠であった。きっと震災前には緑色の美しい水田や畑が広がっていたのだろう、そう思った。

田尾さん、菅野さん、溝口教授の説明によって、飯館村の状況を知ることができた。除染により、肥沃な土は削られて、有機物の少ない山の土が客土されていること。元の肥沃な土地に戻そうにも、土を肥沃にするための家畜の糞も、家畜がないため供給されないこと。林の中の落ち葉や木々も放射能に汚染され、活用できていないこと。動物、森、そして土の連携が欠如しているという事実は、それまでの村の生活がいかに自然との循環によって成立していたかを明確に示していた。またそれだけではなく、震災後、イノシシ・猿・たぬき・うさぎが、畠を荒らすようになったことは、村の生き物たちが、自然のバランスの中で生きていること、そして人間の生活も、他の生き物とのバランスの中に組み込まれているということを浮き彫りにしていた。

それが自分には衝撃的だった。

本当にこんな風に自然と共に生活をしている人がいるのだと思った。そういう生活があるということは頭では知っていた。しかし、都会に住み続けていると、こうした生活がどこか遠い世界の話のような気がしていた。実感を持って理解することができなかった。だから、村の人の生活にとって、自然の重要性などわからなかった。そして、村民にとって自然が奪われることがいかに深刻なのか、実感をもって理解することはなかった。

そういうことなのだ、と思った。私も含め、都会に住む人にとって、こうした村の生活は遠い世界の話なのだ。そして、実感が湧かないから、その生活が奪われることの深刻さ、重みがわからないのだ。

除染後の一帯の農地の上には、フレコンバックが積まれていた。今は「仮置き場」として、置かれているようであった。「仮置き場」も決まっていないのに。

それははたから見ると、かなり「無責任」な行為に思えた。役人が苦し紛れに出した判断で、批判の対象になるようなものであった。ただ自分にはそのことが人ごととは思えなかった。自分だったら、もし自分が役人の立場にいたら同じことをやっただろうな、そう思った。「すぐに移動させるから」といったことを言って、「仮置き場」と称して同じことをやっている自分が容易に想像できた。

全部繋がっているのだ。自分が飯館村で感じたこの感覚も、省庁の「無責任」と批判されうる行動も。「現場」に足を運ばないからそこに生きている人が見えないので。村の生活の実感がわからないから、浅慮で、その場しのぎの行為が、人々の生活を奪い、どれだけ深刻であるかが想像することができないのである。田尾さんが、「省庁の人間も現場にいれば、問題意識を持つ。しかし東京に戻ってしまうと、それを実行することはできない。」と言っていたことが納得できる。現場にいれば、それは目の前にある事実となるため、問題意識は自然と浮かんでくる。しかしながら中央に戻ると、忙しい生活の中で、記憶の片隅へと追いやられてしまう。それはまさに、今の自分のことを言っているのだ。

飯館村に行く前、阿佐ヶ谷の事務所を訪れ、田尾さんから「ふくしまの再生ができなければ日本の再生はできない」という話を伺った時は、その言葉の意味がわからなかった。しかし現地へ行き、無機質な田畠と、積み上げられたフレコンバックの山を見て、そして千恵子さんと宗夫さんの話を聞いた後では、その意味が真に伝わってきた。人の生活、財産が奪われ、信頼を失った地域、ふくしまとはそう言った場所であったのだ。そして、人々の信頼を再び獲得し、この困難を乗り越えられないような国では、日本の国家としての知性が負けてしまったことを示しているのだ。そしてその場合の国家とは、政府のことだけではないのだなと思う。国家とは私たち全員のことで、全員にふくしまの復興を見届けて行く責務があるのではないか。こうした際、誤った知識や、無関心はふくしま再生の障害になりかねない。ありきたりな意見で恐縮だが、ふくしまの現状について飯館村で見たことをそのまま伝えて行き、ふくしまに対する理解者を増やしに行くことが、今私たちにできる最初の一歩なのだと強く感じる。

まずは飯館村の現状を海外で伝えて行く、その責務を果たしてこようと思う。

最後に、お忙しい中ツアーライドを案内してくださった田尾さん、溝口教授、佐野さん、そして宗夫さん、千恵子さん、再生の会の方、マンケイさん、誠にありがとうございました。飯館村の今後どうなっていくかが気になるため、留学後も飯館村を訪問し、関心をもっていかなければと思います。

東京大学法学部3年 平井仁啓

震災前に中学時代、部活の合宿で二回新地町を訪れたことのある自分にとって、原発事故は意識の対象ではあったが、震災から6年余り、実際に足を運んだことはなかった。

メディアを通して原発事故で放出された放射能による汚染に苦しんでいる方々が多くいるのは頭ではわかっていたが、いざ実際に現地を訪れる想像とは全く違ったのだ。失礼であることは承知の上だが、飯館村に車で入った時、特に事故の影響を感じさせる看板等ではなく、遠目には農地が極端に荒廃しているようにも思えず、一見、何が影響しているのかが分からなかった。しかし、よく見ると深刻な異変があちこちにあることに気づいた。耕作地に作物がなく、人影は見当たらない。建物は崩れてはいないが、ところどころ窓や屋根に損傷が見られた。放射線測定器が強く反応する場所が一部ながらあった。放射能の被害というものは全く目に見えないまま蝕んでいくのだ。これほど恐ろしいものはないと思った。

お話を伺っても強く感じた。迷走した政府の初期対応、復興にあたって地元の方々と関係機関の意図の齟齬、これらが信頼感のなさ、復興の遅れに繋がっている。「自分たちで数値を調べるしかない」、「いくら数字上安心と言われても、信用できず野菜を口にできない」、これらの言葉から、分かってはいたものの復興完了とは程遠いことを改めて強く実感した。一方で少しずつ復興に向けて努力をなさっている方がいらっしゃった。先が見えず、不安と戦いつつも懸命に新たな生活を掴もうとしていた。

今すぐ、自分が大きな何かができるわけではない。しかし、自分にもできることは必ずあり、その中でこの事実があることを心に留め、留学先で日本人として本当の現実を伝える努力をしたい。

今回ご協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。今後も真剣に向き合っていきたいと思います。

・飯館村の問題はあまりに複雑で難しい問題であるため、一つの視点から物事を判断するべきではなく多面的な視点から見ていかなければならぬと感じた。メンバーが1日目の感想を述べた後の溝口先生の「素直だね」というコメントと「色んな人がいるからね」という再生の会の方のお言葉にもあったように、あらゆる角度から問題を検討しなければ真の理解には到達できないと感じた。残念ながら都会では「でも、政府から補助金もらってるんでしょ?」「津波で土地を流されなくなつた人たちの方がかわいそうだよ」「仮設住宅も与えられているのに放射線のある土地に住むなんて相当頑固で変わり者なんだね」と冷たい視線を向ける人も多くいる。実際、農民の方はフレコンバックを田んぼに置く代わりに補助金を受け取っているし、確かに直接の被害で亡くなつた方のいる地域の方が気の毒かもしれないし、6000人中340人しか戻っていないということは残り5660人は少なくとも現時点では自ら仮設住宅に住む方ことを選んでいることになる。いいたてホームを訪問した安倍総理の動画を見るととても賑やかで活気のある飯館村がそこには映っていた。そう考えると何が正しいのかがわからなくなってくる。「これは哲学の問題だ」「これは老人の尊厳をどうするかの問題だ」田尾さんが言っていたことがなんなくわかった気がした。そういう人たちに、つまり飯館村を訪れたことがなく、都会で暮らしている方に実際に現地に足を運ぶことを除いて、福島の問題を理解してもらうことは難しいように思えた。そういう人たちに真の理解を求めるためには、まず自分が真の理解に到達しなければならない。例えば、原発で働いていた職員の話を聞く、当時政府側だった人の話を聞く、海外での反応を聞く。そして多面的な視点で物事をとらえる。複雑なものを複雑なまま捉える。飯館村の理解にはこの過程が必ず必要だと思う。私の留学先は非常に多様性あふれる大学だ。小さな一歩ではあるけれど、様々な国の人々に福島の事故の印象を聞き、議論をすることから始めたい。

・もう一つ、飯館村の未来を想像することが大切だ。福島再生の会でお会いした方々はみな生き生きとしていて、熱意があって、とても素敵な方たちであった。しかし、高齢の方が非常に多い。これは問題だ。また、現在340人が帰村しているが、そのほとんどが高齢者だとすると非常に怖い。特に(あまり想像したくないが)田尾さんや土地に深い愛着を持ち、飯館村の自然を愛してきた方々が病で倒れてしまったとき、今のような活動は継続できるのだろうか。飯館村の現状を知らない「日本」によって、飯館村は「かつて」あったものとして放射線とともに蓋をされてしまうのではないだろうか。飯館村に残る人たちの意見は「理解のできない頑固者」として無視され続けてしまうのではないだろうか。南牧村でも感じたが、都會に住む者は、その土地、自然を愛する者の気持ちに寄り添うことが苦手だ。「土地への愛着」が一つのキーワードだと思う。これを都會の人々にどう共感してもらうか、これが飯館村の将来を左右する一つのカギになると思う。そしてこれはおそらく、直接飯館村の方のお話を聞いたごく少数の若い世代の役目になるだろう。若い世代が「私たちにしかできない」という意識を持つつ、これから飯館村に向き合うことが何よりも大切で、私もそうしていきたいと思う。